

ラサリーリヨ・デ・トルメスの人生(下)

作者 不詳
岡村 一 訳

「こんなわけで、弱った体に鞭打つはめになりましたが、心優しい方々のお情けに縋りながら少しずつ道を進み、やがてこの名高いトレドの市^{まち}へ辿り着きました。着いて二週間経つところには、おかげさまで傷口も塞がりました。怪我が治らないうちは、いつもなにかしら恵んでもらえていたんですが、治ってからはいきまうてこう言われました。」

「おい、ろくでなしのぐうたら。とつととあるじを探して奉公しろ」

そんなときは心の中で呟きました、

「で、どこへ行けばそいつはみつかるんでしょう？ それとも神様が新しくばつと作り出してくださるんですか、世界を創ったときみたいに？」と。

こうして家々をまわっておりましたが、施してもらえるもんといえは雀の涙。なにせ「慈悲」はとうにこの世を見限り、天へ昇ってしまっておりません。そんなある日、ひとりの郷士²と巡り会いました。この人はいちおうの身なりをし、髪なんかにきれいに櫛を入れ、悠々とした足どりで通りを歩いておりました。あたしに目を留めましたから見返すと、こう尋ねました。

「おい、奉公先を探しておるのか？」

「はい、そうです」と答えると、その郷士さんは、

「では、ついてこい。わしに会えたとは天恵だな。今日、なにかご利益のあるお祈りでもしたな？」と。そこでついてまいりました。神様に感謝いたしました、この人にこんな言葉をかけてもらったのを。それに服装、雰囲気からして、これぞ求めていた人と感じておりましたんで。

この三人目のあるじに出会ったのは朝で、そのあとこの人はあたしを連れて街をあちこち歩きまわりました。パンなんかの食べ物売っている市場もいくつか通りましたが、そんなときはここで売っているもんを買って担がせて欲しいと思いました。そう祈りさえいたしました。というのもあれは買い物にちょうどいい時間で、日ごろみんなあのぐらいに要るもんを買いに出来ます。けれど、あるじはこんなもんの前をさっさと素通りいたしました。

「ひょっとしたらここには氣に入ったのがないのかもしれない、たぶん別の場所で買うつもりなんだろう」あたしはそう呟きました。

こうやって歩くうち十一時の鐘が鳴りました。するとあるじが大聖堂へはいりましたんで、あたしもついてまいりました。あるじはとても神秘的な面持ちで、ミサやなんかの典礼に参列いたしました。これが全部終わって人がみんな出てしまったあと、あたしたちも大聖堂を後にして、また通りをすたすたくだりはじめました。あたしは天にも昇る心地でございました、自分たちは食い物を手に入れる心配をしなかったと。てつきり信じました、今度のあるじは食い物の蓄えが山のようにある人にちがいない、帰ったらもう飯の支度ができてるんだろう、それもおいらが食いたいようなご馳走が、しかも食いたいだけ、と。

こんなことを考えていると午後一時の鐘が鳴り、あたしたちは一軒の家の前に着きました。あるじが立ち止まりましたんで、あたしもそういたしました。あるじはマントの片側を背中からまわして左肩に掛けると、袖から鍵を取り出して扉をあけ、あたしといっしょに中へはいりました。その家の玄関はとても暗く陰気な感じでした。それはもう薄気味悪くて、あれではいろうとする人間はみんなぞっとしてしまふんじゃないかと。でも、はいつてしまえば小さいけれど庭があり、部屋もまずまずでございました。

中へはいるとあるじはマントを脱ぎ、あたしに手は汚れていないかと尋ねたうえで、はたいて畳むのを手伝わせました。それから傍の、壁に作りつけられた漆喰の椅子を丹念にふうふう吹いてきれいにして、その上に置きました。これだけ済ませると、畳んだマントの横に腰掛け、生まれはどこか、どうしてこの市へきたかについてこと細かに尋ねました。あたしは詳しく話したものの不本意でございました。というのもその時間はそんなことを尋ねるより、食卓の支度をして料理をよそえと言いつけるほうが先だと思いましたが。けれど、とにかく思いつくかぎりの嘘八百の身の上話であるじを満足させました、いいことばかり並べ、そうでない話は控えて。なししろあとのほうはお上品な場にそぐわない気がいたしましたんで。

話を聴いたあとも、あるじはしばらくそのままじつとしておりました。それを見て嫌な予感がいたしました。かれこれ二時近いというのに、死人かと思うぐらいなにかを食べようという様子が見えないのでございます。次にこう思いあたりました——そういえばあやつて扉に鍵を掛けてた、かといつて家の中には階段の上も下も生きて動いてる人の気配がない——。目にはいったのはがらんとした部屋で、ひとり掛けの椅子も長椅子も机も台も、そしてあの坊主が持っていたような櫃もございません。ひと言で申せば魔法の家のよう。じつと腰掛けていたあるじは、やがてあたしに「おい、坊主、昼飯は食ったか？」と尋ねました。

「いいえ、まだです。会ったときは、まだ八時にもなつてなかったから」と答えると、

「確かに朝早くはあったが、わしはもう飯を済ませておった。それで、こうしてなにか食えば、もう夜までなにも口にせんのだ。覚えておけ。だからなんとかがまんしろ。晩飯の時間になったら食おう」

旦那様、実際の話、これを聞いたときは危うく卒倒しかけました。いえ、ひもじさというより、自分の運のなさをつくづく思い知ったからでございます。あのとき、それまでの苦労があらためて頭に浮かび、そのつらい思い出にまた涙が流れました。あのとき、あの坊主から逃げだそうといったんは思ったものの、なるほどいつはあわれな罰当たりだけれど、ひよつとしたら次に出会うあるじはもっとひどいかもしいないと、そう考え直したことを思い出しました。つまりあのとき、それまでのつらい毎日と、この先それほど長くは生きられない運命を

悲しんで泣いたんでございます。でも、とにかく、懸命に涙を隠して申しました。

「旦那様、おいらは子供だけど、おかげさまであんまりがつがつしてないんです。これにかけちゃ、同い年ぐらいの子供の中で自慢できるって思います、おいらはおまえたちみたいに食いしん坊じゃないぞって。それで、今まで仕えてきたご主人様たちにも、このことじゃずっと褒められてました」

するとあるじは、

「そいつは美徳だな。それひとつでおまえをいちだんとかわいがつてやれるぞ。なにしろがつがつするのは豚と変わらん。ちゃんとした人間は節度をもつて食うものだ」と。

あたしは内心泣きました——ほうら、やつぱり！ 出会うあるじ出会うあるじ、みんな空きつ腹はいい菓たとか美徳だとか抜かしやがる。なにが菓た、なにが美徳だ！——。

あたしは玄関の隅へいつて、施し物のパンの残りを懷から取り出しました。あるじはそれを見て申しました。「おい、こつちへこい。なにを食つておる？」

あるじの傍へいつてパンを見せると、三つあつたうちのひとつ、一番ましで大きなやつをとりあげて申しました。

「いやいや、これは実にうまそうなパンではないか」

「えっ？ だけど旦那様、うまそうなんですか、これが？」 そう言うところあるじは、

「ああ、そのとおりだ」と答え、そして「どこで手に入れたのだ？ きれいな手で捏ねたやつだろうな？」と。

あたしが「それはわからないけど、でも変な味はしません」と返事したら、

「だとよいがな」 そう言うてあわれなあるじはパンを口へ持つていき、さっきのあたしに負けない勢いで食ひました。そして「うまい、うまい、いや実に」と。

これで相手がどんなていたらくわかりましたんで、あわててパンを腹に詰め込みました。なにしろこつちより早く食べてしまえば、まだ残つてる分を片づけるのを手伝う気満々でいるのが、ありあつたからでございます。

ます。こうして二人ほとんど同時に食べおえました。そのあとあるじは、ちょっとだけ胸についていた細かなパン屑を手で払い落とすと、隣の小部屋へいきました。そして口の欠けたあんまり新しくない壺を持ってきて、まず自分が飲み、それからあたしに勧めました。あたしがいい子ぶって、

「いえ、おいら、お酒は飲みません」と言ったら、

「ただの水だ。だから別におまえも飲んでかまわん」と。

そこで壺を受けとって飲みました。でもがぶ飲みはいたしません、苦しいのは喉の渇きのせいではございませんでしたので。こんな調子で夜まで過ごしました、あるじが尋ね、それにこつちがなるだけに上手に答えるという形でやりとりしながら。夜になるとあるじは、水を飲んだあの壺の置いてあった部屋へあたしを連れていつて申しました。

「おい、向こう側に立て。見てろ、この寝床の整え方を教えてやる。今度からおまえがひとりでやれるようになる」二人向きあつて立ち、みじめつたらしい寝床を整えました。たいして手間はかかりませんでした、なにしろ並べた長椅子の上に葦の簀の子を敷いて布団が伸べてあるだけのやつでしたんで。この布団というのが、いちおう布団として使つてはいても、いつ洗つたかというような代物なうえ、その役に立たないぐらい中の羊毛がすかすかで、とてもそうは見えませんでした。きれいに伸ばなおすとき、なんとかふわふわにならないかとやってみましたが、やつぱり無理。なにせ固いのを柔らかくするのはなかなか難しゅうございます。この腐れ布団はほんとに中味がなくて、簀の子の上に敷くと葦の一本一本が浮き出て、がりがりに痩せた豚のあばら骨そっくり。この栄養失調の布団には類友の毛布が組になつておりましたが、これがまたもの色さえわからなくなっているようなやつで……。

こうして寝床を整え、やがて夜が更けるとあるじは申しました。

「ラサロ、もう遅いし、ここから市場まではかなりある。そのうえこの市は強盗が多くてな、暗くなると出没して服を剥ぎとるのだ。だから今夜のところはなんとか辛抱しておこうではないか。夜が明けてあしたになればど

うにかなるだろう。というのも、わしはひとり暮らしだから買い置きなどはない。飯というところ外食ばかり。だが、これからはそういうわけにいくまい」

「旦那様、おいらのことは心配要りません。ひと晩ぐらい食わなくなつて大丈夫、平気です。なんならもつとだつて」そう言うところあるじは、

「だつたらおまえは長生きするぞ、ますます元気だな。なにしろ今の常識によれば、長生きには小食が一番だからな」

思いました、もしもそれが長生きの秘訣だとするなら、おいらは絶対死なないね、だつてずっとその秘訣を守らされてきたし、これからだつて因業な生まれのおいらは、死ぬまで守るはめになるだろうからね、と。

それからあるじはズボンと胴着を脱いで枕許に置いて、寢床に横になりました。あたしは足許で寝るよう言われましたんでそういたしましたが、一睡もできませんでした。と申しますのも簀の子の葦とこっちの浮き出た骨とが、ひと晩じゅうずつと取っ組み合いの喧嘩をいたしましたんで。それまでさんざん苦しんだり苦労したりひもじい目に遭つたりしたせいで、体にはもうひと握みの肉も残つていなかったんではないかと。おまけにあの日はなんにも腹に入れてないも同じだったから、ひもじくてひもじくて……。ひもじさと眠気は折り合いがよくございませんでした。あまり感心した話ではございませんが、あの晩、朝までずつと云つていいぐらい繰り返し自分と、そして自分の運の悪さを呪いました。けれどなんといつても苦しかったのは、あるじを起こさないよう寝返りを我慢したことで、いつそ死なせてくだいと何度も神様にお願ひいたしました。

朝になって起きると、あるじはズボンとか胴着とか、上着とかマントとかをはたいて埃を払いにかかりました。あたしもそれを手伝いました。それからあるじは落ち着き払つてゆつくり服を着て、あたしに水を注がせて手と顔を洗い、髪を梳かし、剣帯に剣を着けました。剣を着けるとき、こう申しました。

「ああ、これがいかなる業物か、坊主、おまえが知らんのは口惜しいぞ！ たとえ万金を積まれようが手放すつもりはない。かの名工アントーニオの鍛えし名剣は数々あれど、これの切れ味にはおよぶものはひと振りもない」

のだ」

そうしてあるじは鞘から剣を抜き、指で刃を触りながら申しました。

「どうだ、この刃は？ 首を賭けてもよいが、こいつをさつとやれば羊毛の玉すら切れるのだぞ」

聞いてあたしは心の中で呟きました、でもおいらの歯は鋼^{はがね}じゃないけど、がぶつとやれば四⁴リブラのパンだつて食いちぎれるよ、と。

こう言つたあと、あるじは剣を鞘に収め直して身に帯び、大玉のロザリオを剣帯に着けました。そして悠然とした足どりで、背筋をびんと伸ばし、頭や体をそれは優雅に動かしながら、また、マントの裾を肩に掛けたり腋に挟んだりしながら、右手を腰にあてて出ていきました。玄関を出るとき、こう言い残しました。

「ラサロ、わしはこれからミサへいくが、しつかり留守番しておくのだぞ。そのあいだに寢床を整え、終わつたら川へいつて壺に水を汲んでおけ。川は出て下つたところだ。家を出るときは戸締まりを忘れるな。泥棒にはいられるといかん。鍵はこの戸の柱に掛けておけ、おまえがいなくて帰つてきてもはいれるようになる」

それからあるじは道をのぼっていきました。顔つきも身のこなしもそれはまあ優雅で、知らない人間が見たらアルコス伯爵のごく近い親戚か、そうでなくても身のまわりの世話をする小姓^{こせ}ぐらいには映つたでございました。

「ありがたい、かたじけない！」と、あたしは見送りながら呟いておりました。「人に病を与え、そして癒やしてくださる神様！ あの満足顔を見れば、ゆうべはご馳走を食べてふかふかのベッドで寝たつて誰でも思います。そして、まだ朝早いのにたらふく食べたつて。神様、あなたは人が思つてもみないようなすごい秘密をお作りになるんですね。あの立派な風采やそここの身なりを見て、誰が騙されないでしょう？ 誰が思うでしょう、あのお上品な紳士がきのう一日、下男^{しもや}のラサロが胸の櫃に昼じゅう夜じゅうしまつて持つて、あんまりきれいでなくなつてはるはずのあのコチコチのパンひとつで過ごしたなんて？ そして今朝、手と顔を洗つたあと、手拭いがないから上着の裾をかわりに使つたなんて？ まさか、誰も夢にも思わないでしょう。ああ、神様、この世の

中、さぞあちこちに腐るほどいるんでしようねえ、神様のためには耐え忍ばないことでも、面目なんていうつまらないもののためには耐え忍ぶ人たちが！」

玄関に立つてこんなことをあれこれ思ったり考えたりしながら、長く細い道を遠ざかるご主人様を見送っておりました。角を曲がつて姿が消えるとまた中へはいり、家じゅう隈無く、階段の上も下も見てまわりました。そのあいだ立ち止まることはございませんでした。なにしろ手を出したくなるようなもんが見あたらないんでございます。だから時間はいくらもかかりませんでした。そのあと貧弱な固い寢床を整え、それから壺を抱えて水汲みにまいりました。川へおりてみると、畑のほうにあるじがいて、べールで顔を隠した女二人をしきりに口説いてる最中。どうやら、あのあたりにきまつている商売女のようにございました。いえ、それがいつも大勢たむろしているんでございます、夏になると涼みがてら朝飯にありつきにいくのを日課にしているこんな連中が。誰かが必ずご馳走してくれるとあて込み、手ぶらであの涼しい川辺へ朝っぱらから出てまいるんでございます、土地の旦那様方がそういう癖をつけてしまわれたもんで。

で、申したように、あるじは女たちとして、詩人のマシーアス⁵気どりでオウイディウスの詩の文句にも負けな甘い言葉を語っておりました。女たちは相手に充分その気があると見て、恥ずかしげもなく、お礼はいつものあれで払うから朝御飯をご馳走してくださいとせがみました。それを聞いて寒い懷と熱く求める胃袋を思い出したあるじは、とたんにひどい悪寒に襲われて青くなり、しどろもどろの下手な言い訳をはじめました。きつと女たちは見立てにかけては年季がはいっていたんでございましょう、あるじの症状を見て、これは相手にしても無駄とさっさと見切りをつけました。

あたしはそのあいだキャベツの芯を齧っておりましたが、その朝飯が済むと、なにせ新参の下男でございますから、あるじの目に留まらないうちそそくさと家へ戻りました。家は相当汚くなってる場所もあったものの、いざそこを掃こうとすると道具が見あたりません。さて、どうしようかと思案いたしましたが、とりあえず昼まであるじを待ってみよう、帰ってくるかもしれないし、そのときひよっとしてなにか食べ物を持ってくるかもしれない

ない、うん、それがいいと思いました。けれど甘い期待でございました。

二時になつてもあるじは戻つてまいりません。もう腹が減つてしかたなかつたんで、戸締まりをして言われた場所に鍵を掛け、またもとの稼業をはじめました。低く弱々しい声を出し、両手を胸にあて、殊勝げに天を見あげて「功德になります」とやりながら施しを求めたんでございます、とくに大きいと見えた家々の門口をまわつて。けれど、なにしろあたしはこの稼業がすっかり身につけておりました。つまりあの目の見えない大師匠について修行を重ね、その免許皆伝の弟子になつておりました。だからこのトレドの市に慈悲の心なんかなかつたし、そのうえあの年はあんまり豊作ではございませんでしたけれど、おおいに手練手管を使い、時計が四時を打つ前にはパンを四リブラ腹に収め、別に二リブラ以上袖や懷に入れておりました。家へ引きあげる途中、臍物屋の前を通りがかつたついでに、そこにいた女のひとりになにか恵んでくださいと頼むと、牛の足のぶつ切りをひとつと、臍物を煮たのを少しくれました。家へ着いたら、ご立派なご主人様は先にご帰宅なさつていて、マントを畳んで例の壁の椅子の上に置き、中庭をぶらぶらなさつておいで。あたしが帰ってきたのを見ると寄つてまいりましたんで、こりゃあ遅いと叱られるぞと覚悟いたしましたが、幸いそうはならず、どこへいつていたかと訊かれました。あたしは答えました。

「旦那様、二時になるまでここにいたんですけど、遅くなりなさるようだったから、街へ出て慈悲深い人たちのお情けに縋つてました。はい、これだけいただきました」

服の裾にくるんでいたパンと臍物を見せると、それを目にしたあるじはほつとした顔になつて申しました。「おまえが帰つてから食おうと待つておつたのだが、いっこう戻らんので済ませてしまつたぞ。だが施しを求めるとはまつとうな考えだ。盗むより、功德になりますと言つて物乞いするほうがよい。うん、うん、ずっとよい。ひとつだけ頼みたいのだが、わしの家に住み込んでおると知れんよう気をつけてくれよ。面目にかかわるからな。まあ、この市でわしは知られておらんも同然だから、どうせ噂にはなるまいと思うが。……そもそもこんなところへなどのこのこ出てくるべきではなかつたのだ！」

「それは、旦那様、大丈夫ですよ」と、あたしは申しました。「そんなことを訊こうなんて人は誰もいません。おいらだって喋る気はありません」と。

「そうか、では早く食ってしまえ、坊主。運が向けば、近いうち貧乏暮らしにおさらばできるだろう。ただし言うておくが、この家へ越してきてからなにひとつうまくいったためしがない。きつと家相が悪いのだろうな。不吉な家、縁起の悪い家というのがあって、そこに住む者に不幸をもらたすのだ。この家はきつとそういう類いだ。まちがいない。だが約束してやる。たとえただでやると言われようが、月末にはここから出てゆく」

あたしは壁の椅子の端に腰掛けました。卑しいやつと喧われないよう、外で軽く摘まんだことは黙っておりました。そして晩飯にとりかかり、臓物とパンにかぶりつきました。食べるあいだそつとかわいそうなご主人様の様子を窺うと、そのとき皿がわりになっていたあたしの服の裾から目を離せないのでありました。あわれみを感じました、自分があれぐらい神様にあわれんでいただければと思うぐらい。と申しますのも、苦しいのがわかりましたんで。あれは自分自身それまで嫌というほど味わい、そしてそのときもまた毎日味わっていた苦しみでございました。食べませんかと勧めたほうがよくはないかと思いました。けれど晩飯は済ませたと言った手前、勧めても受けないのではと心配いたしました。つまりあたしとしては、物乞いして恵んでもらったもんでもってあわれなあるじに苦しみを凌いでもらいたい、そしてきのうみたいにその日の「朝飯」を食べてもらいたいと、そう望んでいたわけでございます。なにしろきのうより食べ物が多い、こっちの腹は減ってないというんで、そうしてもらいやすくなっておりますから。

辛い願いは叶いました。そしておそらくあるじの願いも。というのもあたしが食べはじめると、ぶらぶらしていたあるじが寄ってきてこう申したんでございます。

「いや、ラサロよ、実に見事な食いつぶりだなあ。これほど見事に食う人間は生まれて初めて見たぞ。たとえ腹が減っていないくても、こいつを見れば誰しも食いが起こってくるだろうな」

あたしは心の中で呟きました、おじさんが食いたくてしかたないせいだよ、食いつぶりが見事に見えるのは、

と。

でも、なんとかしよう自分から動いて、こつちが手を差し伸べるきつかけを作ったわけですから、応えてやるべきだと思ひ、こう申しました。

「旦那様、『うまいもんは別腹』って言います。このパンはほつぺたが落ちるぐらいうまいです。それにこの牛の足はほんとに上手に煮てあつて、味つけもいいんで、これだけうまけりや誰だつてがつつきたくなりますよ」

「牛の足か、そいつは？」

「はい、そうです」

「言つておくが、この世で牛の足にまさる食べ物はないのだぞ。雉きでさえこいつほどうまいと思うことはない」

「じゃあ、どうぞ、旦那様。食べてみればどんなかわかります」

牛の足と、一番白いパンからちぎつたやつを三つ四つ渡してやると、隣に腰をおろし、食べたくてたまらない気持ちまる出しでかぶりつき、果ては小骨の一本一本に至るまで齧りました。郷土といへば獵犬がつきもんでございますが、もしあるじにそんなのが一頭いたとしても、さすがにあそこまでは齧り尽くさなかつたんではないかと。

「にんにくソースをかければ、こいつは最高のご馳走になるのだがなあ」あるじがそう申しましたんで、あたしは、空きつ腹つていうもつといいソースがかかつてるじゃないかと、聞こえないよう呟きました。

やがてあるじは「実にうまかつた。今日一日なにも食つておらんかのごとくだつた」と。

あたしは密かに皮肉つてやりました、豊年万作になるのがそれとおんなじぐらいほんとだつたら万々歳なんだけどね、と。

それから、水の壺を持つてくるよう言われましたんで、持つてきて渡しました。水は川から汲んできたまま減つておりませんでした。水が要らなかつたということは、あるじに食べ物があり余つていなかった証拠。あたしも水のご相伴にあずかり、あるじと二人、もうなにも言うことはないという気分です。床について、またゆうべ

たいにして寝ました。

話がだらだら長くなるといけませんので端折りますと、あわれラサロは打ち出の小槌となり、一方それを自分のもんにしたこのはったり屋先生は、朝になるとあの満ち足りた顔を作って悠々とした足どりで街を歩いて時間を潰す——そのあと一週間から十日ぐらい、こんなふうにして過ごしました。そのあいだあたしは自分の運の悪さに頭を抱えるばかり。それまで仕えていた強突く張りどもから逃げ、ましなあるじを探そうとしたのはいけれど、出会ったのが食べさせてくれないどころか、反対にこっちが養わなければいけない相手だったなんて……。でも無一文の甲斐性なしとわかって、あたしはこの人がとても好きでございました。反感よりむしろ気の毒さが先立ちました。家へ食べ物を持って帰ってやるため、ひもじさを我慢することもたびたびございましたと申しますのも——

ある朝、この気の毒な人が寢床から起きて、下着姿のまま用を足しに上の階へあがっていったんでございます。その隙にあたしは気になっていたことをはっきりさせようと、枕許に置いてあった胴着とズボンを広げて探ってみました。すると、しわくちゃになったすべすべのピロッドの中着がみつかりました。中には一文もはいつておりません。もうずいぶん金には縁がないような感じでございました。そのとき思いました——この人は文無しなんだ。だから無い袖は振れないってわけだ。それにひきかえ、あの欲張りじじいや罰当たりの我利我利坊主は神様からお恵みをいただいてる。ひとり信者がお布施をくれて、もうひとりは舌先三寸で金や物が転がり込む。なのにやつらのおかげでこっちは餓え死にすることだった。だから憎んであたりまえ。でも、この人は気の毒に思っってやらなきゃいけないんだ——。

ほんとうの話、今でもあんななり、あんな歩き方であんな気どった感じの人に会おうたび、これもまたあるじのお仲間、あのととき見たのと同じ苦しみにあうまわってるんではないかと心配になるんでございます。一文無しだったにしろ、今誰に奉公するか選べと言われたら、申したようなわけで、前の二人ではなくこっちを選ぶでございましょう。ただ、この人については、ひとつだけちょっと首を傾げる点がございました。あんなに気位

を高くしなくてもよさそうなもんと思っておりました。暮らしはどんどん苦しくなる一方なんだから、抑え気味にしたほうがいいのにと。でも、どうやら、気位を高くするのは、あの身分の人たちの中ではあたりまえの固く守られている掟らしくて……。『財布は空でも頭は下げるな』というやつでございます。あわれなもん。こんな馬鹿な生き方をしていれば長生きできないでございましょう。

さて、こんなありさまで、お話ししているような毎日を送っておりましたが、持って生まれた悪運はどこまでもつらくあたつてまいります、おかげでこの苦労ばかりの恥の多い暮らしさえ、続けられなくなつてしまいました。どういふしだいかと申せば——。その年、この土地では小麦が不作で、よそ者の乞食はひとり残らず市を去るべしと市会で決まりました。そして以後みつけた場合は鞭打ちに処す、とお触れが出たんでございます。で、決まったとおり行なわれ、お触れから四日目、クアトロ・カリエスのあたりを乞食連中が鞭で打たれながら、ぞろぞろ引かれていくのを目にいたしました。あたしはその様子を見て怖気を震い、お触れに背いて物乞いをしてやろうなんて、これっぽっちも考えませんでした。そのころ家の中を覗いた者があるとすれば、そこでどれほど『節制』が行なわれていたか、住人がどのぐらい元気がなくて無口だったかを目にしたのでございましょう。それはもうひどいもので、二、三日ひと口も食べずひと言も喋らずといった始末でございました。なんとか命を繋げたのは、木綿糸の糸繰り職人のおばさんたちのおかげ。メリヤスを織っている人たちでございましたが、近くに住んでいて、近所づきあひがあり、知り合いだったんでございます。おばさんたちはあたしのやつれた様子を見てもかわいそうに思い、わずかばかりではございましたが恵んでくれました。おかげで、骨と皮になりながらもどうにかこうにか生きておりました。

あたしはわが身があわれでございました。けれど、あるじのあわれさにはもつと心が痛みました。一週間なにごとについにしなかつたんでございます。少なくとも家ではそのぐらいはなにも。そのあいだあるじがどこをどう歩きまわっていたのか、なにを食べていたのか存じません。正午ごろ道を下ってくる姿は、それは見物でございました。背筋をしゃんと伸ばし、純血種のグレーハウンドの胴よりも長くして！ 面目という厄介なもんを保つ

ため、藁しべ一本持つて——もう家にはこんなもんすらろくにございせんでしたが——玄関に出て齒のあいだをせせておりました、別になんにも詰まっていけないのに。そして相も変わらずこう言つて家相の悪さをこぼさんでございます。

「外観がよくない。この家の不吉さがそう見せるのだ。見てのとおり、陰気で、さびしくて、暗いではないか。ここにおるかぎり苦勞とは縁が切れまい。早く月末にならんものか。そうすれば出ていくのだが」

さて、こうしてひもじさに責め立てられ、苦しい毎日を送つていたわけですが、ある日、なにがどうなったもんか、あるじのお寒い懷に一レアルという金が転がり込みました。あるじはそれを持つて、まるでヴェネチア一国の富でも手に入れたみたいに、大いばりで帰つてまいりました。そして、うれしくてたまらないといった感じのにこにこ顔で、それを渡しなが申しました。

「ほれ、ラサロ、いよいよ運が向いてきたぞ。市場へいつてパンと酒と肉を買つてこい。ひとつ貧乏神の鼻をあかしてやろうではないか！ ほかにも喜ばせてやることがあるぞ。別の家を借りたのだ。だから、この縁起の悪い家とは今月いっぱいでおさらばだ。このぼろ家も、こいつにまつさきに瓦を置いたやつもくそくらえ！ ここを借りたのが運の尽きだった！ 天地神明に誓つて、わしはここに住みだしてから酒一滴、肉ひと切れ口にしておらん。気の休まることも全然なかった。それにしても、どうだこの不吉な外観は！ この暗さ、さびしさは！ さあ、早くいつてこい。今日は酒池肉林だ！」

あたしは渡された一レアルと壺を持つて飛び出し、市場めぎして急ぎ足で通りをのぼりました。うれしくて天にも昇る心地でございました。けれど急いだところでなんになるのか？ 因果な生まれつきの悲しさ、いいことにはきまつてけちがつくようになっております。このときも同じで、それはこういふうしだいでございました——よくぞあるじに金をお恵みくださつたと何度も神様に感謝し、この一レアルをなるだけうまく、上手に使うにはどうすればいいだろうと胸算用しながら通りをのぼっていると、思いがけず死人に出迎えられてしまつたんでございます。輿に乗せられ、坊さんはじめ大勢につきそわれて通りを向こうから下つてまいります。あた

しは壁際へ寄つて道を空けました。遺体を載せた輿が通り過ぎると、すぐそのあとから——あれはきつと後家さんでございましょう——喪服姿のひとりと、ほかの女たちの一団がぞろぞろ歩いてまいりました。そのとき後家さんは泣き叫びながらこう申しております。

「ああ、あなた、どこへ連れていかれてしまうの？ さびしくて悲しい家、暗くて陰気な家。食べることも飲むこともない家よ！」

それを聞いて、あたしは世の終わりがきたみたいに驚いて眩きました。

「ああ、どうしよう！ この死人はうちへ運んでいくんだ！」

そうして踵^{きず}を返し、人々をかき分け、うちをめざし、きた道を息を切らして駆けおりました。こうして家の中へはいると、大急ぎで扉を閉め、お願いです、助けてください、こつちへきていっしょに玄関を守ってくださいと叫びながら、あるじにしがみつきました。まさかそんなことで大騒ぎしていると思わないあるじは、少しどきりとした様子で申しました。

「おい、なんだこれは？ なんとという声を出すのだ。どうした？ なぜそう乱暴に扉を閉める？」

「たいへんです、旦那様、こつちへきてください。ここへ死人を運んできます」

そう言うところあるじは、

「なんだと!?」と目を剥きました。

「すぐそこ、ちよつとのぼつたところで死人に出くわしたんです。後家さんがついて歩きながら言つてました。『ああ、あなた、どこへ連れていかれてしまうの？ 暗くて陰気な家、さびしくて悲しい家、食べることも飲むこともない家よ！』って。だから旦那様、うちへ運んできます」

そう上機嫌でいられるはずもないあるじだったのに、なんと、それを聞くと腹を抱えて笑いだしました。笑つて笑つて、ずいぶん長いあいだ喋れなかつたぐらいでございしました。あたしはそのあいだ扉^{かど}に門^{かど}を掛けたくえ、半身になって体を押しつけ、絶対はいってこられないようにいたしました。やがて葬列は通り過ぎていきました

が、そのあとまだ、死体を家の中へ運び込んできはしなかと、どきどきしておりました。飽きるほど笑いしても、まだ飽きるほど食べていないご主人様は、笑いやんだあとこうおおせになりました。

「まったくだな、ラサロ。後家さんがそう言うのを聞いて、おまえがそんなふうにしたのも無理はない。だが幸いそうはならず、通り過ぎてくれたのだから、さあ、扉をあけて、早く食い物を買ってこい」

「旦那様、通りの向こうへいつてしまふまで待ちましょう」と言うのと、焦れたあるじは通りに面しているその扉のところへきて、大丈夫だからと言ってあげました。あたしは怖くて生きた心地がしておらず、こうでもしてもらわないとどうにもなりませんでした。で、また使いにまいました。けれど、あの日ご馳走を食べはしたものの、うまいともなんとも感じませんでしたし、それから三日間は青ざめっぱなしでございました。あるじと申せば、あのときのあたしの思い込みを思い出しては、さもおかしそうに笑っておりました。

三人目の文無しのあるじ、つまりこの郷土さんとはしばらくこんなふうに暮らしましたが、そのあいだじゅうずっと、どういうつもりでこの人がトレドへ出てきて住んでいるのか知りたく思っておりました。と申しますのは、この人に奉公することになった最初の日にもう、よそからきたんだと気づきました。なにしろ土地の人間にほとんど知り合いがなく、つきあいたいつきあひもございませんでした。やがて望みどおり知ることが知れました。どういういきさつかと申せば、ある日あたしと二人でまずまずの食事をしてそれなりに満足したあるじが、身の上話をはじめたんでございます。なんでもカステイリヤ・ラ・ビエーハ地方の出だそうで、同じ村の騎士⁷に帽子をとって挨拶したくなかったという、ただそれだけの理由で地元を離れたんだとか。あたしは申しました。

「旦那様、相手が言いなさるような身分で、財産がもつとありなさるんだつたら、先に帽子をとらないほうが礼なんじゃないですか、だって向こうもちゃんと帽子をとりなさってたつていうお話だから」

「なるほど騎士であった。確かに財産があった。わしに対して帽子もとっておった。だがな、いつもこちらが先に挨拶しておるのだから、たまには向こうが気を遣って先にしてもよさそうなものではないか」

「でも、たぶん、おいらだつたらそんなこと気にしないけど。とくに自分より身分も財産も上なら」

こう申すとあるじは、

「おまえは子供で、面目のなんたるかがわからんのだ。今の時世、面目は心ある者にとつて命にも替えがたいのだぞ。で、ひとつ教えておくが、見てのとおりわしは郷士、しかし道で伯爵と出会い、きちんと帽子を脱いで挨拶されなかつたならば、次に見かけたときは帽子をとらずに済むよう、近づく前になにか用があるふりをして適当な建物の中へはいるか、あるいはもし横道があればそこへはいる。天に誓つて、わしにはそれだけの才覚があるのだ。そもそも郷士は神と国王のほか、何者に対しても義務を負つておらん。また心ある者であれば、誇りを高く持つことを片時も忘れるべきではない。今でも思い出すが、故郷におつた時分、ある職人を罵り、手を出しかけたことがあつた。というのわしの顔をみるたび、『神様のご加護がございますように』などと抜かしおつたからだ。わしはそいつに言つてやつた、『おい、下種下郎殿よ、きさまはなぜそう礼儀を知らん？ なぜそこいらの人間に挨拶するごとく、『神様のご加護があるように』などと言わねばならん？』以来、その男は遠くからでも帽子をとり、しかるべき挨拶をするようになった」

「だつたら神様のご加護がありますように」つて言つて、他人に挨拶するのはいけないんですか？」と訊くとあるじは、

「馬鹿を言うな！ それは身分の低い者への挨拶だ。だがわしのように身分の高い相手に向かつては、『あなた様のお手に口づけいたします』ぐらい言うのが礼儀だ。あるいは最低でも『あなたの手口づけします』だな、わしに挨拶するのが騎士である場合だが。こんな具合に、故郷であの男が神様のご加護、神様のご加護と馬鹿のひとつ覚えのように言うのを、こりんざい容赦しなかつた。あれに限らず誰であれ、『神様のご加護があるように』などと抜かすやつは赦さんし、これからも赦すつもりはない。そんな挨拶をしてよいのは国王陛下だけだ」

「あれあれ」とあたしは内心呆れました、「だから神様があんまり気にかけて助けてくだらないんだよ。なにしろ、他人がおじさんのご加護をお願いしちやいけないつて言うんだからなあ」と。

あるじはこう続けました。

「だいいちわしはそれほど貧しくない。故郷^{くこ}へ帰れば家屋敷ぐらいはあるのだ。もしこれがバリヤードから十六レグ⁹アも離れた生まれ在所でなく、あの市^{まち}きつての高級地区コンスタニー⁸リヤにでもちゃんと無事建つておるとすれば、善美を尽くした大邸宅だ、二十万マラベデーでも買えまい。鳩小屋¹⁰も持つておった。残念ながら壊れてしまったが、もしそうでなければ毎年二百羽をくだらん雛が生まれておるだろう。ほかにもいろいろある、いちいち挙げんが。面目を考え、すべて捨てた。そしてこの市^{まち}へ出てきた、なにかよい口がみつかるだろうと見込んでな。だがあてが外れた。聖堂参事会員など教会のお偉方には何人も会ったが、話にならん我利我利亡者ばかり。世界じゅうの人間が束になってかかろうが、あの性根ばかりは変えられまい。木っ端騎士の連中にも仕えてくれと頼まれた。だがこういう者への奉公はひどく骨が折れる。なにしろ人間であるのを忘れ、便利使いされる道具とならねばならん。それが嫌なら『出ていけ』と言われておしまいだ。報酬といえはたいいてい長期の分割払い。だがもつと多く、もつとも可能性の高いのは、ただ食わせるだけというやつだ。たとえ連中が改心して奉公人の労に報いる気になったところで、衣裳部屋へ呼ばれ、汗染みのついた胴着か、着古したマントなり上着なりを一着もらうぐらいがせいぜい。爵位持つ人物があるじにしようが、やはり貧乏暮らしに変わりはない。

では、ひよつとしてわしは能なしで、満足のゆく奉公ができんのか？ 誓つて言うが、もしわしが誰かと主従の縁を結べば、そのあるじにとつてなくてはならん側近となり、おおいに「忠義」を尽くしてみせる。なにしろ嘘にかけては人後に落ちんし、名人級の阿諛追従ができるのだからな。あるじが十八番^{おはこ}の冗談を言つたときは、たとえそれが面白くてたまらんというのでなくとも大笑いするとか、どんなに本人のためになろうが気に障ることは口が裂けても言わんとか、目の前では言葉も行ないもとびきりまめまめしくするが、目に触れんときはおざなり、きちんとやろうとせんとか、聞こえるとわかつておればわざとほかの奉公人と喧嘩してみせ、あるじにかわることは少しもおろそかにせんよう見せかけるとか。あるじが下僕の誰かを叱つておるときは、その下僕を庇うようできてその実火に油を注ぐようなことを言い立てるとか、あるじが気に入つておれば褒め、逆であれば

意地悪く愚弄するとか、屋敷の中の者や外の者について告げ口するとか、他人の生活を探ろうと嗅ぎまわつてご注進に及ぶとか。ほかにもさまざま似たような「忠義立て」があるが、どれもわしにとつては朝飯前。昨今御殿ではこんな見あげた振舞いがあたりまえで、そのあるじたる人々のお氣に召す。この人々は立派な人間が屋敷うちにおるのを好まんどころか、むしろ忌み嫌い、見くだして馬鹿呼ばわり。やれ世事に疎いの安心して物事を任せられんのと貶す。近ごろは小ずるいやからがあるじに對し、このような手をあれこれ弄しておる。わしもできれば同じようにやつてみたいが、いかんせん運に恵まれず、そのあるじがみつからんのだ」

こんなふうにあるじは、自分がどんなに能のある人間か語る一方で、相も変わらず自分の運のなさをこぼしたんでございました。

さて、あるじとこうして話していると、玄関から男と婆さんがはいつてまいりました。男は家賃、婆さんはベツドの借り賃の催促。二人の計算によれば、二ヶ月分であるじが一年かかつても得られないぐらいの額になります。確か十二、三レアルだったんではないかと。あるじは二つ返事、市場へいつて二カステリヤーノ金貨を一枚崩してくるから、昼過ぎにもう一度きてくれないかと申しました。ところが出ていったきり二度と戻りませんでした。夜。だから二人はまたあとできたもののあとの祭り。あたしは二人に、まだ帰ってきていないと申しました。夜になつてもあるじは戻つてまいりませんので、ひとりで家にいるのが怖かつたあたしは、あの隣のおばさんたちの家へいき、わけを話して泊めてもらいました。朝になるとあの取り立ての二人がそこへやつてきて、隣の旦那は？と尋ねました。けれど、《そつちの扉が駄目ならこつちの扉》とやつたところで……。おばさんたちはこう答えました。

「ほら、うちに旦那が使つてる子がきてますよ。家の鍵も持つてます」

二人に旦那は？と訊かれましたんで、どこにいるか知らない、両替に出ていったきり戻っていない、お金を両替したあと、自分を置いておじさんやおばあさんたちから逃げてしまつたんだらうと申しました。それを聞いて二人は捕り方の役人と公証人を呼びにいき、まもなく連れて戻つてまいりました。そして鍵をとりあげたうえで

あたしについてこいと命じ、立会人を呼び集め、財産を差し押さえて賃料の形にしようと玄関の戸をあけて中へはいりました。そして家じゅう探しまわりましたが、お話ししたとおりきれいなもんでございましたんで、

「あるじの持ち物はどうした? 櫃とかタペストリーとかの家財道具は?」と、あたしに尋ねました。

「わかりません」と答えたら、

「こりゃあゆうべのうちにどこかへ運んで隠したんだな」と。そして「お役人様、この小僧を捕まえてください。こいつはありかを知ってます」と。

そう言われた役人はあたしのほうへきて、シャツの襟を掴んで脅しました。

「おい、あるじの持ち物がどこにあるか言え。言わんと豚箱へぶち込むぞ」

こんな目に遭ったのは初めて。それは襟を掴まれたことは何度も。けれどもつとやさしくでございました、目の見えない男を導いてやるためでしたんで。だから怖くてたまらず、べそをかきながら、訊かれたことはちゃんと答えますと申しました。すると、

「よし、よし。じゃあ隠さず喋るんだ、恐がらなくていいから」と。

公証人が財産目録を作ろうと、壁に作りつけられた漆喰の椅子に座り、あるじはどんなもんを持っていたかと尋ねましたんで、こう答えました。

「はい。あの旦那様は、とつても立派な屋敷と、壊れてるけど鳩小屋も持つてるって言っていました」

そうしたら、

「そりゃあいい。たとえどんなぼろ屋敷でも、それでおれたちに借りを返せる」と。そして「で、そいつは市のどこにあるんだ?」と尋ねました。

「生まれ在所にあるって……」そう答えたら、

「いや、こりゃあ仕事やしやすい。で、その生まれ在所っていうのはどこだ?」と、また訊きましたから、

「カステイリーヤ・ラ・ビエーハ地方の出だって言ってなきったけど」そう答えると、役人と公証人はげらげら

笑って申しました。

「そりゃ詳しくて結構な話だな、あんたらが貸しを取り立てるには、結構すぎるかもしれんが」

やっぱりその場にいたあの隣のおばさんたちが、こう証言してくれました。

「旦那方、この子がかかわりございません。あの郷士の旦那とこへきたのはついこのあいだで、旦那についてなに知ってるかっていえば、みなさんと同じでなんにも。かわいそうにおちびちゃん、お腹空かしてうちへくるもんだから、そのたんびこれも人助けと、分けてやれるだけのものを分けてやってみました。で、夜になると旦那んちへ帰って寝てたんでございます」

関係ないのがわかると無罪放免になりました。役人と公証人は男と婆さんに手間賃を催促いたしました。それがもとでひどい言い争いがはじまり、大騒動になりました。というのも男と婆さんが、なんの手間賃だ、なにも差し押さえなかったじゃないか、^{びた}鏝一文払う義理はないとはねつけ、役人と公証人は、もつとたいじな件があったのに、それをうつちゃってここへきたんだぞと言いつ返したからでございます。こうしてお互いさんさんやりあったあと、最後は役人の助手が婆さんの古毛布を持つて——まあ、毛布自体はもうそんなに持たないような代物でございましたが——怒鳴りあいながら五人連れ立つて去っていききました。そのあとどうなったかは存じません。思いますに、あのかわいそうな毛布は、みんなのため金を払ったんじゃないかと。だとしたら結構な使われ方でございます、なにせそれまで苦勞を重ねやつと樂隠居という段になって、またあちこち貸し出されたわけでございますん。

お話し申したとおり、あたしは気の毒な人だった三番目のあるじに捨てられ、いよいよ自分の運命のむごさを感じ知りました。それがどれだけあたしを打ちのめすかが、はっきりいたしましたから。物事を普通とは正反対にしたからでございます。つまり普通はあるじが下僕に捨てられるのに、あたしの場合そうはならず、あるじがあたしを捨てて逃げてしまいましたんで。

次¹¹のあるじを探さなければなりませんでしたが、四人目はメルセス会の修道士でございました。さつきから話に出ているおばさんたちが口を利いてくれた男で、親戚だと申ししておりました。この男は坊主の勤めが大嫌い、修道院で飯を食うのも大嫌い、外を出歩くのが大好き、生臭いことや他人^{ひと}を訪ねるのが死ぬほど好きというやつでございました。それはもうすぐくて、この男ひとりで履き潰した靴の数は、修道院のほかの坊さんたちの分を全部合せたより多かつたのではないかと。あたしが生まれて初めて履き潰した靴は、この男からもらったやつでございました。ただ履き潰したといつても、一週間と持たなかつたんでございますが。あたしもまたそれだけしか持ちませんでした、とにかくあんなにあちこち歩きまわられては……。ここでは申しあげませんが、ほかにもいろいろあつて、この男のもとを去りました。

そのあと、これまた持つて生まれた悪運のせい、あの五番目のあるじと出会いました。贖宥¹³状を配り歩くのが商売の男でございましたが、まあ、こいつぐらい厚顔無恥なものありません。ある意味、並ぶ者なしの贖宥¹³状配り。これだけのやつは見たこともないし、これからも見ないでございましょうし、また誰か見た者があるとも思えません。と申しますのも手練手管に長けているうえ、のべつなにかもつといい手はないかと考えているような手合いだったんでございます。

贖宥¹³状を配ろうと町や村へ足を踏み入れると、まず坊主というか司祭になにか手土産を渡します。これまたあんまり値打ちのない、たいしたことないもんでございます——時期によつて¹⁴ムルシア産のレタス一個とか、ライムやオレンジを二、三個とか、桃一個とか、黄桃を二つ三つとか、ひとり頭青梨二、三個とか。こうやつてご機嫌とりに努めて商売の便宜を図らせる、つまり贖宥¹³状を売るため教区の信徒を集めさせていたんでございます。贖宥¹³状のご利益か、あるじはあらかじめ相手の学がどの程度か調べがついておりました。もしもラテン語がわかると聞けば、ぼろが出ないようそれをひと言も口にいたしません。けれどそのかわり、品のあるきれいなスペイン語で立て板に水で喋ります。相手が金の力にものを言わせた坊主、つまり学を認められてまっとうに坊主になっ

たんでなく、金で坊主になった人間とわかれれば、その前で聖トマス・アクイナスに大変身、二時間もラテン語でべらべらまくしたてます。いえ、実際はラテン語なんかではないんですが、少なくともそう聞こえるというわけ。

土地の連中がなかなか贖宥状を受けたがらないときは、なんとか工夫して無理にでも押しつけ、それでみんなに迷惑をかけておりました。また、ときどきは悪賢い手を使うことも。現に見た手口をいちいち語っていたら日が暮れてしまうでございましょうから、ひとつだけ、よくぞ考えた、どれだけ悪賢いんだというやつをお話いたします。それをお知りになれば、どんなにしたたかな男だったか充分お示しできるかと。

あるときトレド地方のラ・サグラのある村に二、三日足を留め、説教をしながら例によって熱心に贖宥状を勧めておりました。けれど受ける者がございせん。どうやら誰もその気がない様子。これに癪癪を起こしたあるじは、どうしてくれようと考えたあげく、翌日村人を集め、贖宥状を配るのは今日が最後と告げようと決めました。

そしてその晩のこと、食事が終わったあと、捕り方の役人と甘いもんを賭けて勝負をはじめました。ところがやがてその勝負をめぐって喧嘩になり、罵りあいをはじめました。あるじは役人を泥棒と、役人はあるじをベテン師と呼びました。あげくのはて、わがあるじたる代理配布官¹⁵下^{げいか}が、賭けごとをしていた玄関にあつた畑番用の槍を握み、役人のほうも腰の剣に手をかけるといふ騒ぎに。あたしども三人がわあわあ叫んだりどたんばたんやるのを耳にして、泊まり客や村人たちが駆けつけてきて引き離しました。すっかり頭に血がのぼっていた二人は、こいつ殺してやると、止めにかかっていた人々の手をふりほどこうともがきましたが、大騒動を聞きつけて野次馬がわつと集まり、宿屋が人で溢れ返るようになりまして、さすがに刃傷沙汰はまずいと、また口喧嘩に戻りました。そのとき役人はあるじに、おまえはベテン師だ、おまえが贖宥状と触れまわつてるのは偽物だと毒づきました。結局、村人は仲直りさせるのは自分たちの手に余ると諦め、役人を宿屋から別の場所へ連れ出すことにいたしました。こうして、あとには腹の虫のおさまらないあるじがひとり残されましたが、そ

のあるじもやがて泊まり客や村人たちに、どうかもうそれぐらいにしてお休みくださいと宥められ、主従、床に就きました。

朝になるとあるじは教会へいつて、贖宥状を配るためのミサと説教を知らせる鐘を鳴らすよう求めました。村人は集まりましたが、贖宥状についてぶつぶつ申し立てがありました、あれは偽物だ、役人が喧嘩のとき自分ではらしてたじゃないか、と。そういうわけで、ただでさえ気が進まなかったのが、今度の一件で絶対もうんかという気持ちになっていたんでございます。

代理配布官猊下は説教壇へ登って説教をはじめ、ありがたい贖宥状を受ければ大きなご利益と赦しを得られる、この機会を逃してはならない、と人々を煽りました。話が最高潮に達したとき、教会の入り口にあの役人が姿を現わしました。役人は入堂するときの型通り、跪いて十字を切って短く祈ると、立ちあがって大きな声でゆっくり、言葉を選び選びこう話しはじめました。

「善男善女のみなさん、あたしの言葉にちよつとだけ耳を貸してください、あとは誰の話を聴こうがじゃまはしませんので。あたしは今ここで説教してるこのペテン師といっしょにこの村へきました、実はまるめ込まれていました、仕事を手伝えは分け前をやると言われて。でも、そんなことをすれば自分の良心を穢し、みなさんにも損をさせてしまうと感じて、やつぱりいかんと思ひ直しました。そこでみなさんにはつきり言います。この男が勧めている贖宥状は偽物です。こいつの言葉を鵜呑みにして、そんなもんを受けてはいけません。もうあたしはどういう意味でもその贖宥状とは無関係。今を限りに職杖を手放します。地面へ投げ捨てます。いつかこの男が詐欺で捕まったら、どうか証人になって、あたしは仲間じゃない、ペテンの片棒を担いでいない、反対に嘘だとばらしてやつと正体を教えた、そう証言してください」

役人はこれだけ言うとお黙りましたが、実はその途中で、その場にいた何人かの旦那が立ちあがって、騒動にならないよう役人を教会の外へ出そうといたしました。けれどあるじがその人たちを止め、いいからほっておいてなんでも言いたいだけ言わせてやりなさい、言うとおりにしなければ破門ですよ、と申し込んでございます。そし

て自分もまた役人が今みたいなことを全部言ってしまうまで、黙って見ておりました。役人が口を噤むとあるじは、ほかにもっと言いたいことはあるか、あれば言いなさいと促しました。すると役人は、

「あんたについても、あんたのベテンについても、言いたいことはまだ山ほどある。でも今はこのぐらいにしとくよ」と。

代理配布官猊下は説教壇の中で跪いて手を合わせ、上を見あげてこう宣^{のたま}いました。

「われらが主たる神よ、あなたの目から隠れるものではなく、あなたにはすべてが明らか。あなたに不可能はなく、あなたは全能。それゆえあなたは真実を、いかにわたくしが不当な辱めを受けているかをご存じ。けれど、わたくしのことはかまいません。彼を赦します、主よ、わたくし自身があなたからお赦しいただけるよう。どうか目をつぶってやってください。自分がなにを言い、なにをしているかわかつていないのです。しかしあなたに対して行なつた侮辱、これについてはお願いいたします。正義のため望みます。どうか捨ておかれませう。この場の誰かが、あるいはこのありがたい贖宥状を授かろうと考えたかもしれないのに、あの男の偽りを信じ、気が変わつてしまいかねませんので。それは、そのわれらが隣人にとりこのうえなく悪しきこと。ゆえに主よ、お願いいたします。捨ておかれませう。むしろただちにこの場で奇跡をお現わしください、このようになさつて——仮にあの人物の言葉が事実で、わたくしがベテン師の悪党であれば、この身を説教壇もろとも沈め、地の底深くに留めて、どちらかふたたび地上へ出てこれないようなさってください。反対にわたくしの申すことが真実で、あれの言葉が嘘、悪魔に唆され、会衆からかくも大きなご利益を奪い去つてしまうためのものであるなら、同じくあれを罰し、一同の目にその邪な魂胆が明らかになるようなさってください」

ご主人様がこうして敬虔に祈りおえるやいなや、邪な役人は派手に倒れました。床にぶつかったとき、教会じゆうに響きわたるほどすごい音がいたしました。それから役人は呻き声をあげ、歪めた口から泡を吹き、顔をしかめて手足をばたつかせながら、床をごろごろ転げまわりました。それを見てみんなわあわあ叫んだり、どたばたやったりして、もうたいへんな騒ぎ。互いになんと言っているか聞きとれないありさまでございます。中に

はぞつとして青くなっている者も。そうかと思えば「主よ、この人を助けたまえ、救いたまえ」と祈る者があつたり、「当然の報いだ、あんな嘘を言い立てたんだから」と白い目で見る者があつたり。あたしにはおつかなびつくり映りましたが、そのうちその場にいあわせた何人かが役人に近づいて腕を掴みました。近くにいた人々をばかすか殴っていたんでございます。脚にしがみつく人たちもありました、死んでも離さないという感じで。なにしろこんなに癖の悪いラバもほかになくて、それはもうむちゃくちゃ蹴っておりましたんで。こうやってずいぶん長いあいだ体を抑えておりました。なにしろ十五人を超す人間が上に乗っていたんでございますが、気を抜こうもんならみんなしたたか顔を殴られたでございましょうから。

こんな騒ぎをよそに、ご主人様は相変わらず説教壇で跪いたまま天井を仰いで、手を上へ差し伸べておいでございました。そして顔には神秘の光に照らされているような恍惚の表情を浮かべ、教会の中に満ちていた泣き声も叫び声も物音も、その神聖なる法悦境から目覚めさせることはできませんでした。

教会に集まっていた善男善女があるじのもとへ駆け寄り、大声で呼び起こして頼みました——「かわいそうにあの人が死にそうです。どうか助けてあげてください。これまでの振舞いや暴言は水に流してあげてください、もうその報いは受けとられるんですから。この命の瀬戸際から、今の苦しみから救うためなんかにできなさるんなら、功德と思つてしてあげてください。なにしろ主があなた様の願ひに応え、あなた様への辱めの報いにただちに罰を下されましたんで、もうあの人が罪を犯したこと、あなた様が誠実に真実を述べられたことは、自分らにははつきりしましたから——」。

代理配布官猥下は、心地よい眠りから覚めたみたいな目でその人々を見、罪びとを見、そして周りに集まっていた面々を見まわし、それからとてもゆっくりした口調でこう宣のたまいました。

「善男善女のみなさん、神がかくもまざまざとそのみ徴しるしを現わされた者のため願うなど、本来けつしてあつてはならぬことです。しかし悪に報いるに悪をもつてするなかれ、受けた辱めは赦すべし、というのもまた神の教えです。ですから安心してお願いしてよいでしょう、神よ、そのみ教えどおりなさってください、どうか神聖なる信仰を

妨げあなたを冒瀆したこの男をお赦してください、と。みなさん、ともに祈りましょう」

それから説教壇をおりてこう呼びかけました——さあ、心を込めてわれらが主に、あの罪びとを赦したまえとお願いしましょう。そして、もしも主がその罪の重さゆえ悪魔が彼に取り憑くのを許したのであれば、悪魔を追い出し、身も心ももとどおり健やかにしたまえ、とも——。

全員が祭壇の前で跪き、坊さんたちといっしょに低い声で連禱を唱えだしました。そのときわがご主人様は十字架と聖水を手に、床に押さえつけられている役人のほうへ歩み寄りました。そして見おろしながら連禱を唱えおわると、両手を高くあげ、糸より細くして白目が少し見えるだけになった目で見あげ、祈りはじめました。長く敬虔な祈りでございました。それを聴いてみんなすすり泣いておりました。よく信心深い人々が、これまた信心深い説教師が行なうキリストの受難の講話を聴いて泣いておりますが、あれとおんなじ雰囲気でございます。あるじはその祈りの中でわれらが主に対し、主の望みは罪びとの死ではなく生きての悔いあらため、それゆえ死と罪の権化たる悪魔に誘惑され操られたこの者を赦したまえ、生きながらえさせ、もとどおりにし、悔いあらためさせて罪を告白させたまえ、と願いました。

それが終わると今度は贖宥状を持つてこさせ、役人の額の上に置きました。すると罪びとは、だんだん落ち着きはじめ、われに返る様子でございました。そしてしまいにすっかり正気づく、と、代理配布官^{げいか}下の足許に身を投げ出して赦しを求め、あれを言ったのは悪魔の口だ、悪魔に言わされたんだと告白いたしました。そして、ひとつはあなたを陥れ、かつとさせられた腹癒せをするためだった、もうひとつは、ここで贖宥状を受けるというような功德を人々に積まれたら、悪魔にとつてとても苦痛だからで、これが理由としては大きかった、とも。

わがご主人様は役人を赦し、二人は仲直りいたしました。そのあとみんなわれもと贖宥状を求め、村では老若男女、それを持つていない者がいないも同然になりました。

この出来事の噂はあたりの村々へ広まりました。あたしどもがどこへいこうが、説教するまでもなく、それどころか教会へいく手間さえ要らず、ただで配る梨かなんかみたいに村人のほうから宿へ贖宥状をもらいにまいり

ました。こんなわけでわがご主人様は、あたしたちがまわったあの辺の十からの村で、説教ひとつせず、同じように千枚ばかりずつ捌いたんでございました。

恥を申せば、この狂言が演じられたとき、あたしも度肝を抜かれ、ほかの大勢の村人同様奇跡と思い込んだ口でございます。けれど、あとであるじと役人が一件について話しながら、馬鹿め、ひっかかったと大笑いしているのを見て、ずる賢いあるじが悪知恵を働かせてひと芝居打ったんだと悟りました。そして子供心にも、なるほど、うまく考えた、と感心しましたし、きつとこんな悪いやつらがあちこちで罪のない人々を似たようなペテンにかけてるんだろうな、ともいいたしました。

結局この五人目のあるじとは四ヶ月近くおりましたが、そのあいだ、やっぱり嫌と言うほどきつい思いをさせられました。

そのあとは、タンバリンに絵を描く職人だった親方に雇われ、絵の具を作る仕事をいたしました。このときも相変わらず苦勞続きでございました。その時分には、もうあたしもいいあんなちゃんになっておりましたが、ある日町の大聖堂へはいったところ、その主任司祭様に雇っていたく運びとなりました。あたしはこの方いいロバと水瓶四個と鞭をお貸しいただき、街をまわって水売り歩く商売をはじめました。これが楽な暮らしを手に入れるため登った階段の一段目、と申すのもこれで食うに困らなくなりましたんで。ふだんは稼いだ中から毎日三十マラベディー渡しましたが、土曜の稼ぎと、そのほかの日の三十を超える分はそっくり懐にはいりました。

商売はともうまういきましました。はじめてまる四年経つころには、儲けをしつかり貯めといたおかげで、古着で、それはもうぱりっとしたなりができるぐらいの金ができておりました。そのとき買い揃えた服は、時代のついたファスチアン織りの胴着、くたびれてはいないけれど袖に飾り紐の縁取りがあり、前を留められる形になった上着、もとは毛の立っていたマント。それにクエーリヤルの古刀で、年代物中の年代物も手に入れました。こうやって一人前の格好になったあたしは、ご主人様の前へいって、ロバをお返しします、もうこの仕事は辞めさせ

ていた、だきたいと存じますんで、とお伝えいたしました。

主任司祭様にお暇乞いしたあと、ある捕り方の役人の助手になりましたが、すぐ辞めてしまいました。危ない仕事に思えたからでございます。とくにある晩なんか、教会に逃げ込んでいたやつらが石を投げたり棒を振りまわしたりしながら追いかけてきて、あたしは逃げきったものの、踏みとどまったあるじはこっぴどい目に遭いました。これに懲りて続ける気がなくなりました。

で、どんな飯の種を探して腰を落ち着けよう、これまでの苦勞の骨休めができて、年をとったときに備えて蓄えも持たたいが、と思索していたところ、天がゆくてを照らし、実入りのいい道へ、暮らしへと導いてくださいました。友達や旦那様方に助けられて望みのもんが手にはいり、それまで耐え忍んできた苦勞もなにもすつかり報われたんでございます。つまりお上の役人になったというし、だいで。所詮、これではなければうまい汁は吸えないとわかりましたから。それからずつと今日までこの勤めで身過ぎ世過ぎをいたしております、神様と旦那様にお仕えするかたわら。勤めの中味はと申せば、大声で人々に告げ知らせること、この市で売られる葡萄酒とか、競売のときとか、失せ物とか。お上から引きまわされている罪人に同行して罪状を叫ぶ役もいたします。早く申せば触れ役でございます。

勤めはこれまで順風満帆、思いどおりやれてまいりました。ですから役目にかかわることならば、なんでもたいていあたしに話を通されます。これはもうほんとにそうで、市じゅうどこでも、葡萄酒^{まち}だろうがなんだろうがなんか売ろうとすれば、このラサロ・デ・トルメスが一枚噛まないかぎり一文も儲けられないと、みんなそう承知いたしております。

こうなったころ、あたしの旦那様、あなた様のしもべでお友達のサン・サルバドル教会の主席司祭様から、うちで働いている下女を嫁にしてはどうかというお話をいただきました。主席司祭様のお酒をお預かりして呼び売りしておりますんで、あたしの才覚と真面目な暮らしぶりをごらんになり、また人となりにについての評判な

んかもお聞きになって、その気になられたんでございます。で、あたしとしましては、こういうお偉い方とご縁を結んでおいてけつして損はない、なにかのときはきつと頼りにできると思い、お話をお受けいたしました。こうして嫁にしましたが、今まで後悔したことはございません。と申しますのも、この娘は氣立てがよく、下女の仕事も一生懸命やるうえ、これのおかげであるじの主席司祭様から、ひとかたならないご贔屓とご援助を賜っておりますんで。毎年何度か、四ファ²⁰ナーガ近い小麦を女房にくださいます。ほかにクリスマスや復活祭あたりになると肉とか、パンのお供えをする時期には古くなつてもう穿かない股引とか。そのうえご自宅近くに小さな家を借りられるようにしてくださいまし、日曜と祝日にはたいいあたしどもにおうちで御飯をご馳走してくださいます。

けれど、人の口に戸が立てられないのは世の常。みんな、うちの女房が旦那様のお宅へ寢床を整えにいたり、料理を作りにいったりするのを見ては、ああどうだ噂し合い、そつとしておいてくれません。ああ、ありがた、ほんとのことを言ってくれて。——こんな皮肉を申すのも、女房がこの手の冗談を喜ぶ女でないうえ、旦那様がちゃんとお約束くださったからでございます。それはきつとお守りくださるか。つまり、ある日、女房のいる前であたしに向かつてとても丁寧にお話しいただきました、こんな具合に——

「ラサロ・デ・トルメスよ、他人に悪口を言われて氣にしているようでは出世はおぼつかんぞ。こう言うのもな、わたしなどは、おまえの女房がうちへ出入りするのを誰かに見られて陰口叩かれようが、屁とも思わんからだ。あれがうちへきたとしても、本人やおまえにとつて恥になるようなことはなにも起こらん。約束する。だからなにを言われようが氣にせんがいい。氣にするべきは自分自身にかかわること、すなわちおまえにとつて得か損かだ」

「旦那様」と、あたしは申しました。「あたしは大樹の陰に寄つて生きていこうつて決めたんでございます。それはまあ、友達の中にはいろいろ言うやつがおります。それどころか、いっしょになる前女房が三回も腹ぼてになった、これは確かな話だと、そう聞かされたことも二度や三度じゃございません。『腹ぼて』なんていう言葉、

旦那様の前で不謹慎でございますが……女房もいることでございますし」

それを聞いて女房は真つ赤な嘘だと喚きちらしました。それはもうすごい剣幕で、家が壊れてあたしら下敷きになってしまふんではないかと思いました。そして次にわつと泣きだし、あたしとの仲を取り持つてくださったお方を罵りました。そのすさまじさに、しまった、これは口が裂けても言つてはいけなかつたと臍を噛みました。それで旦那様と二人、かわるがわるさんさんだめたりすかしたりして泣きやませました。あたしはこの話はこりんんざい、死ぬまで口にしないと約束いたしましたし、また、昼だろうと夜だろうと旦那様のおうちへ出入りしていい、ちつともかまわない、だつておまえの身持ちの固さは折り紙つきなんだからと言つてやりました。こうしてあたしども三人、互いに納得したんでございます。

あれから今日まで、あたしどもがこの話をするのを聞いた者はございません。それどころか、誰かが女房についてなんか言いそうな気配がしたら、遮つてこう言つてやります。

「なあ、友達なら嫌なことは言いつこなしにしようぜ。おれを嫌な気分にするやつは友達だと思つてやらないかな。とくに女房との仲を割こうつてやつは、だ。なにしろおれはあいつが世界一だいで、わが身以上にかわいいんだ。あいつがいるおかげで神様がたつぷりお恵みを垂れてくださる。おれにはもつたいないぐらいよくしてくださる。ご聖体にかけて誓うが、そりゃあいい女なんだ、あいつは。このトレドの市に住んでるどの女にも引けはとらない。そうじゃないなんて抜かすやつがいたら相手になつてやるぞ」

こうしてもう誰もなにも言わなくなり、わが家も平和になつたんでございます。

お聞きおよびかと存じますが、昔われらが凱旋將軍たる皇帝陛下が、この名高いトレドの市へご臨幸あそばして国会を召集なさり、その折り盛大な祝典、祝祭が催されました。ただいまのはまさしくあの年の話。こうしてあたしはとうとう文句なしの幸せの絶頂に達し、わが世の春を迎えたんでございます。

註

1 古刊本にはこの前に「第三章 ラサロがある郷士に奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。
郷士は最下級の貴族。

2 当時の有名な刀工。妻のイサベル女王とともにレコンキスタ完了の立役者となったフェルナンド王の剣などを作った。

3 リブラは約四六〇グラム。

4 一四世紀のスペインの詩人。恋愛にまつわる伝説が数多くの文学作品にとりあげられた。

5 言葉を訳して「旧カステイリヤ」と表記されることもある。スペイン北西部の地方で、現在のカンターブリア自治州、リオ・ハ自治州、カステイリヤ・イ・レオン自治州に相当する。

6 騎士は郷士のひとつ上の身分。郷士が騎士を名乗るには一定の条件、とりわけある程度以上の所得のあることが必要だった。

7 スペイン北西部の都市。トレドからは直線距離で二百キロ強の地点にある。当時は事実上スペインの首都だった。

8 一レグアは約五・六キロメートル。

9 鳩小屋を持つことは郷士の特権で、鳩の飼育はよい収入源になった。

10 古刊本にはこの前に「第四章 ラサロがメルセス会のある修道士に奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。

11 古刊本にはこの前に「第五章 ラサロがある贖宥状配りに奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。

12 贖宥状とは、本来、罪の赦しを受ける際に課せられる償いの軽減あるいは免除のため購うものだったが、後にこれの購入により罪の赦しそのものが得られるという考えが広まった。日本では「免罪符」と呼ばれることが多い。

13 アンダルシアとバレンシアに挟まれたスペイン南部の地方。

14 本来は贖宥状にかんする最高責任者の肩書き。

15 古刊本にはこの前に「第六章 ラサロがある主任司祭に奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。

16 剣の生産で有名だったセゴビア地方の町。「郷士」が口にした名工アントーニオもここで仕事をしていた。アントーニオについては註20参照。

17 古刊本にはこの前に「第七章 ラサロがある捕り方の役人に奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。

18 「触れ役」はそれなりの収入はあったものの、賤業と見なされていた。ラサロが「お上の役人」と言ったあと、なかなか「触れ役」という言葉を出さないのはそのせいであろう。

19 一ファネーガは約五五・五リットル。

20

神聖ローマ帝国皇帝カール五世（スペイン国王カルロス一世）のこと。